

身近なまちの風景物語(27)

高く用心

雨、雪、風、暑さや寒さなど、気候とどのように折り合いをつけて暮らしていくのか。その土地に住まう人たちが長い時間をかけてその方法を模索してきた。そしてその経験と実践から一定のかたちをつくりあげてきた。

治山治水は文明発生の根幹である。川を治める者は国を治めるという格言のように、河川の改修は太古からの人類の命題である。

同時代的な思想や技術、材料を背景に、治水事業が取り込まれてきた。戦国時代の武田信玄による“信玄堤”など各地で様々な工夫があった。

水やそれを集める川は人々の暮らしに欠かせない。その近くに住まうことは至極当然である。ところがそれがそこで暮らす人に災いを引き起こすこともある。そのため水害が発生しないように河川整備が進められるが、完全な治水は難しい。

一方で、川と対峙するのではなく、共存する思想もある。浸水被害を前提として、暮らしを維持するという考え方である。その工夫の一つが水塚である。地域によって「みつか」「みづか」「みずつか」と呼称される。

長雨や台風などの大雨によって河川が決壊して流域に浸水被害が生じる。収穫した農作物や生活の場が水に浸かってしまう。それを防ぐために、家の敷地の一部を盛り土して、その上に蔵などの建造物を設けた。土盛りも浸食する恐れがあるため、盛り土部分を石垣で囲むこともある。

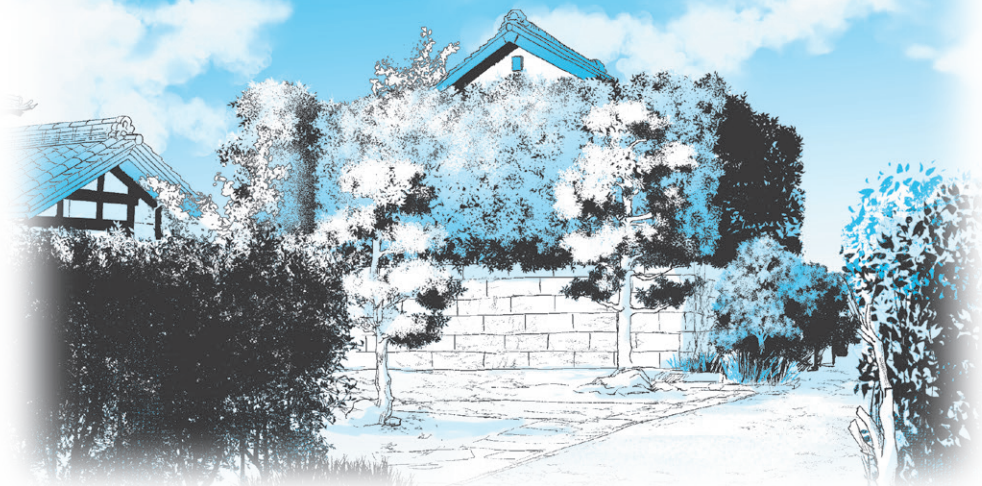
その蔵には収穫物や生活用具などを保管した。浸水した時には、そこで一時的に暮らすこともあった。地域によってはそこに舟を置くこともあったという。

茨城県内でも利根川やその支流である小貝川の流域では現在でもこの水塚が残っている地域がある。かつては各所に散在していたが、水害の頻度が少なくなるにつれて減少している。

不測の事態に備え、前もって準備、用心する。一時的に浸水被害を受け入れ、人と川とが共存する暮らしの知恵である。その地域に根ざす文化的景観である。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程1年）